

博士學位論文

論文内容の要旨

および

論文審査の結果の要旨

東邦大学

戸部美起より学位申請のため提出した論文の要旨

学位番号甲第 538 号

学位申請者 : 戸 部 美 起

学位審査論文 : Characteristics of motivation and their impacts on the functional outcomes in patients with schizophrenia

(統合失調症患者における動機づけの特性および社会的機能に対する影響について)

著 者 : Miki Tobe, Takahiro Nemoto, Naohisa Tsujino, Taiju Yamaguchi, Naoyuki Katagiri, Chiyo Fujii, Masafumi Mizuno

公 表 誌 : Comprehensive Psychiatry (DOI: 10.1016/j.comppsy.2015.10.006)

論文内容の要旨 :

【目的】統合失調症患者の動機づけの障害は、早くから、疾患の中核的な特徴であると考えられてきた。近年、統合失調症の長期的転帰を規定する社会機能障害を改善する因子として、自己決定理論に基づく内発的動機づけが注目されつつあるが、統合失調症患者の動機づけの障害の詳細な検討は未だ十分にはなされていない。本研究では、一般的因果律志向性尺度 (General Causality Orientation Scale, 以下GCOS) を用い、内発的動機づけをパーソナリティ特性の視点から評価した。GCOSは個人の志向性を動機づけの因果律に基づき、自律志向性、コントロール志向性、動機づけ喪失志向性に分類するための質問紙であり、分類された3つの志向性は、それぞれ順に内発的動機づけ、外発的動機づけ、動機づけ欠如 (amotivation) に対応する概念とされている。本研究では、患者群と健常者群の間で各動機づけ志向性を比較し、また、患者における各動機づけ志向性と、認知機能、精神症状、社会機能、生活の質 (Quality of Life, QOL) との関連について検討を行った。

【方法】本研究は、東邦大学医療センター大森病院外来通院中の統合失調症患者 53 名 (平均年齢 31 歳、男 : 女 29 : 24 人) および健常群 38 名 (平均年齢 31 歳、男 : 女 20 : 18 人) を対象に行った。内発的動機づけの評価には GCOS および、先行研究において内発的動機づけの指標として使用されているクオリティ・オブ・ライフ評価尺度 (QLS) 三項目 (目的意識、意欲、好奇心) 総計を用いた。GCOS は 12 の質問項目で構成され、例として、項目 1 では、「あなたはしばらく勤めていた会社で、新しいポストへの異動が決まりました。あなたは最初に、どんなことを考えたり、思ったりしますか。」という状況を設定した問い

が与えられる。その状況に対し、「①新しいポストでその責務がはたせなかつたらどうしよう、と不安になる。(動機づけ喪失志向性)、②新しいポストで、今よりも良い仕事出来るかどうかと考える。(コントロール志向性)、③新しい仕事が、自分にとって興味深いものかどうか、知りたくなる。(自律志向性)」といった、前述の各志向性に対応した3つの考え(または行動)を表現した項目が続き、回答者は①~③それぞれについて、1点(全く当てはまらない)~7点(良く当てはまる)で点数をつける。3つの志向性ごとに12項目を合算し、各志向性はそれぞれ最高84点、最低12点の間で評価される。認知機能は統合失調症認知機能簡易評価尺度日本語版(BACS-J)、精神症状は陽性・陰性症状評価尺度(PANSS)、陰性症状評価尺度(SANS)、社会機能は日本語版社会機能評価尺度(SFS-J)、QOLは、WHO QOL26および抗精神病薬投与下主観的ウェルビーイング評価尺度短縮版(SWNS-J)を用いて評価した。本研究は東邦大学医学部倫理委員会の承認を得て行った。

【結果】患者群では、健常者群に対し有意に自律志向性が低かった。コントロール志向性、動機づけ喪失志向性では、両群の間に有意な差は認めなかった。また、患者群において、自律志向性と精神症状、QOL、社会機能の間に有意な相関を認めた。さらに重回帰分析により、患者の社会機能に自律志向性が有意に寄与することが示された。

【考察】統合失調症患者は、健常者に比し内発的動機づけが低下しており、これは先行研究の結果とも一致したものであった。一方で、本研究では、外発的動機づけと動機づけ欠如(amotivation)については、両群の間に差は認められなかった。また、患者の内発的動機づけは、統合失調症患者における認知機能、精神症状、社会機能、QOLと関連することが示された。これらの結果から、内発的動機づけの障害は統合失調症患者の生物学的、心理的、および社会的と多岐にわたる臨床像と関連していると考えられた。さらに、重回帰分析の結果から、諸因子の中でも、内発的動機づけは、患者の社会機能を規定する重要な因子であることが示された。以上より、良好な長期的転帰と機能回復に向けて、患者の動機づけ特性を十分に踏まえ、創造性や発散的思考を促すような内発的動機づけを高める介入手法の開発が望まれる。

【結論】GCOSを用いて測定した、統合失調症患者の内発的動機づけは、健常者に比して有意に低下していた。内発的動機づけの障害は、統合失調症の臨床像と広く関連し、また、社会機能を決定づけていることが示された。内発的動機づけを高める治療法が開発が、統合失調症患者の機能回復において重要であると考えられる。

1. 学位審査の要旨および担当者

学位番号甲第 538 号	氏 名	戸 部 美 起
学位審査担当者	主 査	黒 木 宣 夫
	副 査	長 谷 川 友 紀
	副 査	端 詰 勝 敬
	副 査	西 脇 祐 司
	副 査	中 野 弘 一
<p>学位審査論文の審査結果の要旨：</p> <p>Deci (1975, 1980) は行動の原因の所在によって「因果律」の個人差に焦点をあて、パーソナリティ特性の観点から動機づけ様式の類型化を試みた。因果律志向性は3つに類型化、すなわち自律志向性、コントロール志向性、動機づけ喪失志向性で、順に内発的に動機づけられやすい傾向、外発的に動機づけられやすい傾向、動機づけが生じにくい傾向と言い替えられる。Deci & Ryan (1985b) はこのような因果律志向性を測定する尺度 (GCOS) すなわち、一般的因果律志向性尺度 (GCOS) を開発した。本研究では、患者群と健常者群の間で各動機づけ志向性を比較し、患者における各動機づけ志向性と、認知機能、精神症状、社会機能、生活の質 (QOL) との関連について検討を行った。ある状況を提示する短文の後に、各志向性を示す行動 (考え) を表現した項目を設定 (パーティ等の場面設定) し、それらがどの程度自分に当てはまるかを7件法で評定した。評価は自記式で7段階評価で12項目を合算し、各志向性はそれぞれ最高84点、最低12点の間で評価された。対象は統合失調症患者53名、および健常群38名である。内発的動機づけの評価にはGCOSおよびクオリティ・オブ・ライフ評価尺度 (QLS) 等を使用した。認知機能は統合失調症認知機能簡易評価尺度 (BACS-J)、陽性・陰性症状評価尺度 (PANSS)、陰性症状評価尺度 (SANS)、社会機能は社会機能評価尺度 (SFS-J)、WHO QOL26等を用いて評価された。結果は、健常者群に対し有意に自律志向性が低く、コントロール志向性、動機づけ喪失志向性では両群の間に有意な差は認めなかった。また、患者群において、自律志向性と精神症状、QOL、社会機能の間に有意な相関を認めた。さらに重回帰分析により、患者の社会機能に自律志向性が有意に寄与することが示された。統合失調症患者は、健常者に比し内発的動機づけが低下しており、患者の内発的動機づけは、統合失調症患者における認知機能、精神症状、社会機能、QOL と関連することが示された。さらに、重回帰分析の結果から、諸因子の中でも、内発的動機づけは、患者の社会機能を規定する重要な因子であることが示された。</p> <p>2月23日学位審査では、5人の出席のもとに行われた。研究要旨の発表の後活発な議論がなされた。自己探求的な内発的動機づけをどういう角度からみるのか、統合失調症の健常者と比べるだけではなく、動機付けが低いのは、精神症状の影響をどう排除するのか等の議論がなされた。審査を通じ、統合失調症という疾患の中核的障害である内発的動機づけの障害に対して、さらに発病前、発病後、早期、慢性期の縦断的研究が必要との申請者の見解も表明され、以上の審議結果より本研究は学位授与に値すると判定し、審議を終了した。</p>		